

令和 2 年 6 月 18 日現在

機関番号：32644

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2019

課題番号：26370903

研究課題名(和文) 古代・中世の北海道における儀礼に関する考古学的研究

研究課題名(英文) Archaeological study on rituals in ancient and medieval Hokkaido

研究代表者

内山 幸子 (Uchiyama, Sachiko)

東海大学・国際文化学部・准教授

研究者番号：20548739

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、北海道の古代から中世に行われた儀礼の詳細について、動物遺体や住居址をもとに検証し、当時の精神観を明らかにすることを目指すものであった。研究の結果、家送り儀礼と動物儀礼が従来の認識以上に頻繁に行われていたことに加えて、両儀礼が連動する動きも、一部の事例で明確に捉えられた。

以前から、当該地域・時期では、人を葬る際に、副葬品となる土器や刀子を破壊する例が知られていた。今回の例も、家や祀っている動物遺体に火をつけることで本来の形や機能を失わせ、別の世界へと送る、一種の儀礼的行為だったと考えられる。このような精神観は、古代から中世にかけて連綿と続いていたことが明らかである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究で対象とした文化は、外来の要素が強いとされるオホーツク文化と、在来の文化である擦文文化・アイヌ文化とに2分される。これらは、土器や住居、生業の形態や人骨の形質などで差異が大きいものの、本研究で取り上げた精神観の面では、家や祀っていた動物遺体に火を放ち別の世界に送るという点で、共通した要素が見られた。むしろ、同じオホーツク文化でも、サハリンでは今のところ類例が顕著ではなく、北海道の縄文文化以降の文化との共通性が見出せる。

この結果から、以前から議論的になっていた、オホーツク文化や擦文文化、アイヌ文化の系統や文化間関係について、今後議論を進めていく上での重要な要素を追加できたといえる。

研究成果の概要(英文)： In this study, I examined the details of the rituals that took place from ancient times to the Middle Ages in Hokkaido (Okhotsk culture, Satsumon culture, Ainu culture) based on animal remains and dwelling pits, and clarify the spiritual view at that time. As a result of the research, it was clearly understood that the house rituals and animal rituals were performed more than ever before, and that in some cases, these rituals were linked.

It has been known for some time in the area/time to destroy potteries and swords that are burial items when burying people. It is considered that this example was also a kind of ritual act in which the original shape and function of the house and the animal bones were ignited and sent to another world. It is clear that this spiritual view continued from ancient times to the Middle Ages.

研究分野：北東アジア考古学

キーワード：儀礼 精神観 動物遺体 住居址 オホーツク文化 擦文文化 アイヌ文化

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 北海道の古代・中世では、動物儀礼について詳しく報告され、検討が進められてきた。しかし、近年、これまで儀礼と認識されてこなかった事例のなかに、実用的な理由なく焼かれた動物遺体が含まれることが明らかとなっている。従来、動物遺体が焼けた原因は、調理や遺棄に求めることがほとんどであったが、骨が破碎するほどの火力で調理されることは通常なく、また、現代のように、不用品をわざわざ燃やして遺棄したとも考えにくい。このことは、オホーツク文化の目梨泊遺跡から出土した焼けた動物遺体が、特定の動物種や部位に集中することからも推測される(内山幸子 2004「目梨泊遺跡の動物利用について」『目梨泊遺跡』)。このように焼けた動物遺体を儀礼と関連づけて検討した例は、申請者の研究例を除いて少ない(内山幸子 2006「オホーツク文化の動物儀礼」『北海道考古学』42)。

(2) 北海道では火災住居の確認例が多いが、このうち縄文時代の火災住居については、検出率が不慮の失火によるとはみなせないほど高いことから、葬送的意味合いの強い意図的な放火によって惹き起された可能性が指摘されている(大島直行 1994「縄文時代の火災住居 - 北海道を中心として - 」『考古学雑誌』80-1)。これは、家焼きを伴う家送り儀礼が縄文時代に存在した可能性を示す重要な指摘であったが、その後、関連論考が単発的に出されたものの(村本周三 2007「北海道先史時代の火災住居集成」『セツルメント研究』6、内山幸子 2011「オホーツク文化の焼失住居と動物儀礼にみる「火」の意義」『高梨学術奨励基金年報平成 22 年度研究成果概要報告』、佐藤宏之 2012「オホーツク文化竪穴住居の「家送り」儀礼について」『トコロチャシ跡遺跡オホーツク地点』)、火災住居の研究が積極的に進められる状況にはなっていない。

(3) 動物儀礼と家送り儀礼はともに「火」が重要な要素となるが、これら両儀礼を関連させて総合的に検討したものは申請者の研究例を除いて皆無に等しい。火は、古くから、採光や動物除け、調理、土器作りなど、さまざまな場面で用いられてきた。火の使用には、燃料の準備や延焼防止のための管理が必要になる上、火が燃えさかる様子はインパクトがあり、対象物にも著しい変化を生じさせる。このように存在感のある火を儀礼で用いたことは、当時の人々の精神観の解明を進める上で重要である。

(4) オホーツク文化、擦文文化、アイヌ文化については、近年、相互の系統や文化間関係に対する関心が高まっているが、儀礼や精神観の側面から 3 文化間の関係に迫った例は、個別の遺跡での検討例を除いてほとんどなく、研究の開始が望まれていた。

2. 研究の目的

(1) オホーツク文化、擦文文化、アイヌ文化の動物儀礼の詳細について、遺跡に残された動物遺体を中心に明らかにすることが目的の一つである。このうち、オホーツク文化についてはかなりの研究蓄積があるが、分析が行われていない動物遺体も少なくないため、収蔵機関で未分析の資料を観察し、祀られた動物遺体や、焼けた遺体が一定量以上ある場合は可能な限り分析し、資料の増加を図る。一方、擦文文化、アイヌ文化については、オホーツク文化に比べて動物儀礼の痕跡は少ないが、炉やかマドから出土する焼けた動物遺体についても注目し、動物儀礼の概要の把握に努める。

(2) オホーツク文化、擦文文化、アイヌ文化の家送り儀礼の存否や詳細について、火災住居を中心にみていく。このうち、オホーツク文化の火災住居についてはかなり把握できているため、新規資料の追加を行う。他の2文化については、特に擦文文化で膨大な住居の検出例があるため、住居址を収集したうえで火災住居を抽出し、火災住居の検出率や時期的変遷、地域性などの概要の把握を目指す。

(3) 各儀礼の概要を把握した後に、動物儀礼と家送り儀礼が同一住居内や近接地点で確認された事例があるか見ていき、両儀礼の関連性の有無を明らかにする。

(4) オホーツク文化と擦文文化、アイヌ文化における動物儀礼と家送り儀礼から見出せる精神観を比較し、その近似性と差異から、3文化間の系統や関係について解明を試みる。

3. 研究の方法

(1) 動物儀礼と家送り儀礼に関する先行研究を整理し、史料に記されたアイヌ文化の儀礼に関する記述を抽出した。

(2) 動物儀礼の事例の収集と未分析となっている動物遺体のなかで儀礼に関わる可能性の高い資料の分析を行った。未分析の動物遺体のなかには数十年前の調査で出土した資料もあり、当時の発掘調査日誌や図面などを読み込むことから始めた資料もあった。おもな分析対象遺跡は、沼浦海水浴場遺跡(オホーツク)、目梨泊遺跡(オホーツク)、カモイベツ遺跡(オホーツク、アイヌ)、松法川遺跡(オホーツク)、弁天島遺跡(オホーツク)、トーサムポロ湖周辺竪穴群遺跡(オホーツク、アイヌ)である。

動物儀礼の事例から、祀られた動物の種類や部位、出土地点、出土状況(焼けているか否かを含む)などをまとめた。

(3) 住居址の収集を行ったが、ここでは完掘された住居址だけでなく、住居の一部が調査された事例も含めた。そのうえで、火災住居の抽出を行い、住居内の火災箇所や時期ごと及び地域ごとの火災住居の検出率などをまとめた。

(4) オホーツク文化、擦文文化、アイヌ文化での各儀礼の概要から、共通性と差異を抽出し、儀礼や精神観からみた文化間の系統や関係性について検討を行った。

4. 研究成果

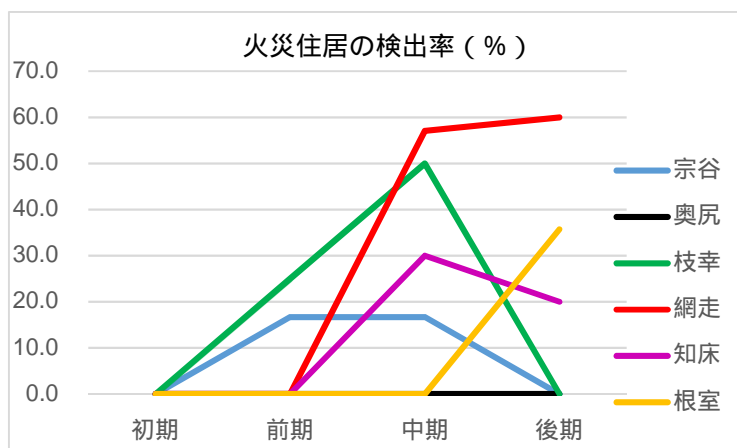
(1) オホーツク文化では、火災住居が多く、201軒中61軒(可能性があるものを含めれば70軒)で火災の痕跡が確認されている。火災住居のなかには失火が原因のものもみられるが、完掘されていない住居がかなりの割合を占めるため、火災住居の実数はここに示した以上に多かった可能性がある。研究開始前よりも事例がかなり増加したこのデータから見ても、家に火をつけて別の世界へと送る、家送り儀礼が頻繁に行われていたことが明らかである。

地域的に見ると、網走地域での確認例が圧倒的であり、火災住居の半数ほどが同地域に集中する。隣接する知床地域や根室地域がこれに続き、道東を中心に行われた儀礼であることが再確認できた。これに比べると宗谷地域や枝幸地域では、火災住居の検出率が平均で1割

前後（可能性があるものを含めればとも15%を超える）と低い。それでも、家送り儀礼が行われたとされる縄文時代後期並みの値であり、同儀礼が道内の分布域のほぼ全域で行われた可能性が考えられる。

時期的に見ると、火災住居の確認例が多い道東部では、後期（貼付文期）の検出例が目立つ（図）。ただし、初期（鈴谷期）と末期（元地期）（末期は図から除いた）を除けば、他の時期にも一定程度の事例は確認されている。なお、住居の検出数自体は後期に比べて1/7ほどと少ないものの、火災住居の検出率だけ見れば、網走地域の中期（刻文期）でもかなり高い値となっている（同図）。

地域と時期を合わせれば、火災住居の検出数は、網走地域の後期で突出する。一方で、道北部では後期になると火災住居がほとんど見られなくなるという傾向をたどる。



オホーツク文化では、地域性の存在がさまざまな側面で指摘されているが、家送り儀礼においても明確な地域性の存在が見て取れる。

(2) オホーツク文化の動物儀礼のうち、屋内で行われた儀礼（屋内儀礼）は、火災住居の軒数よりも多い、201軒中80軒（可能性があるものを含めれば82軒）で確認された。動物遺体は腐食してしまうこともあるため、実数はより多かった可能性がある。このため、動物に対する屋内儀礼は、家送り儀礼以上に頻繁に行われた儀礼であったといえる。

住居の隅に動物遺体を集積した例が多いが、なかには、炉の脇や炉のなかから動物遺体が出土した例も20例近くあり、火との関連性の高さがうかがえる。これは屋外で動物を祀った事例（屋外儀礼）でも見出せる特徴で、斜里町カモイベツ遺跡では屋外炉のなかから哺乳類の焼けた遺体が数多く確認されている。

屋外で見つかる動物遺体については、遺棄によるものか儀礼によるものかの判別が難しい。しかし、なかには、特定の動物種や部位が集中的に焼けているという規則性が見出せる事例もあり、儀礼と呼べるほど定型化していなくても、火をつけることが一種の儀礼的行為だった可能性が十分に考えられる。

オホーツク文化で祀られる動物は野生の哺乳類や鳥類が中心であるが、「火」をキーワードに出土資料を渉猟すると、焼けた魚類骨が集中的に出土する事例も見出せる。焼かれた意図は不明なため、これも動物儀礼だとすれば、祀る対象は従来の認識より広く、儀礼の形態もバラエティに富んでいたことになる。

(3) オホーツク文化で、家送り儀礼と動物儀礼が同一住居内で確認された例は、35例（可能性があるものも含めれば39例）ある。これらの事例では、祀っていた動物遺体を屋内に置いたまま家に火を放ったことが明らかであり、家と動物とを同時に別の世界へと送ったとみなしてよさそう。これに関連して、それほど数は多くないが、火災住居のなかには、屋内で祀られた動物遺体周辺がとくに激しく燃えていた事例も数例報告されている。

(4) 擦文文化やアイヌ文化では、オホーツク文化に比べて、考古学的に動物儀礼の痕跡が少なく、同儀礼が行われる頻度は低かったようである。ただし、オホーツク文化でも類例があったように、哺乳類や鳥類だけでなく、魚類や貝類も祀る対象になっていたとすれば、炉やカマドへの魚類骨の投入もこれに類するものであった可能性は捨てきれない。ただし、このような事例では一層、遺棄との判別が困難で、今後も慎重に検討していくべき課題である。

(5) 擦文文化における火災住居の検出率を明確に示すことはまだできていないが、少なくとも数の火災住居があることは確かである。このため、オホーツク文化ほど頻繁にはないにせよ、家送り儀礼が行われたとみなすことができる。アイヌ文化の住居は、検出例自体が少ないが、さまざまな伝承や記録から、家に意図的に火をつける家送り儀礼があったことは、以前から広く認識されているところである。

(6) 北海道の古代から中世では、人を葬る際に、土器の底部に孔を開けたり、刀子を曲げたりしてから副葬する例が知られている。本研究で取り上げた家送り儀礼や一部の動物儀礼も、家や祀る対象となった動物遺体に火をつけることで、本来の形や機能を失わせ、別の世界へと送る、一種の儀礼的行為だったと考えられる。このような精神観は、北海道では古くは縄文時代から確認されており、本研究で対象とした古代から中世にかけても連綿と続いていたことがうかがえる。

(7) オホーツク文化は、人骨の形質や住居の形状が特異であったり、中期の刻文土器が大陸の靺鞨文化の土器に類似したりするなど、外来の要素が強いとされる文化である。しかし、本研究で、むしろオホーツク文化においてより明確に、縄文時代以来の家送り儀礼が盛行している様相が確認されたことは注目に値する。同じオホーツク文化でも、サハリンでは、火を用いた儀礼は今のところわずかにしか確認されていない。また、オホーツク文化で顕著な動物儀礼も、あくまでも北海道内での現象であり、サハリンの同文化で類例はほとんど知られていない。このように、在地の文化とされる擦文文化やアイヌ文化で、縄文時代以来の儀礼や精神観が続いているだけでなく、外来の要素が強いとされるオホーツク文化でも、北海道内で展開していく過程で、地域差こそあれ、在地の儀礼や精神観を吸収したように見えることは、北海道における古代・中世の文化系統や文化間関係を考える上で、たいへん重要な示唆を与えるものである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 種石悠・内山幸子	4. 巻 27
2. 論文標題 網走市能取岬西岸遺跡b地点発掘調査報告	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 北海道立北方民族博物館研究紀要	6. 最初と最後の頁 91-104
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 内山幸子
2. 発表標題 北海道におけるオホーツク文化の儀礼
3. 学会等名 北海道考古学会月例研究会
4. 発表年 2014年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 内山幸子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 六一書房	5. 総ページ数 578（担当部分：219-235）
3. 書名 世界と日本の考古学 オリーブの林と赤い大地（オホーツク文化の精神世界における「火」の意義）	

1. 著者名 内山幸子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 北海道印刷企画株式会社	5. 総ページ数 408（担当部分：346-360）
3. 書名 斜里町カモイベツ遺跡（カモイベツ遺跡の動物遺体（2018年度）部分担当）	

1. 著者名 柳澤清一・内山幸子・藤田尚・山谷文人ほか	4. 発行年 2018年
2. 出版社 礼文・利尻島遺跡調査の会	5. 総ページ数 200
3. 書名 北海道利尻富士町沼浦海水浴場遺跡（第2次）沼浦遺跡（第1次）発掘調査報告書	

1. 著者名 内山幸子	4. 発行年 2015年
2. 出版社 北海道印刷企画株式会社	5. 総ページ数 583ページ（561-583ページ）
3. 書名 根室市トーサムボロ湖周辺竪穴群（1）（「動物遺体」部分担当）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----